

きぬさやえんどうの安定生産に係る調査研究

中島農業研究会
代表 道見 拓也

1. 調査研究の目的

高収益作物であるきぬさやえんどうの栽培に当たっては、干ばつや高温障害により品質や収量が低下するといった課題があり、播種日をずらした栽培や減肥減農薬による生育収量調査等を行い、栽培技術の向上を図ることで安定生産を実現し、収益性アップを目指す。

2. 調査研究の方法・内容

○品種

絹子町（収量があり、病気に強い品種）

○栽培概要

栽培面積	播種日	畦幅	収穫開始日	収量 (kg/10a)
20a×2	4/27	密植栽培 132cm×18cm	6/28	988
	6/15		8/1	595

施用量 (kg/10a)			防除	
土改資材	肥料	追肥 (開花期)	収穫開始後 2週間	収穫開始後 4週間
生石灰 30	農配小豆用 50	液肥花果神 (1本72g)を 1,000ℓに希釈	アディオ ン乳剤	モスピラン 顆粒水和剤

※ナモグリバエやアザミウマ等が少なく3度の防除で終了した。

3. 調査研究の結果

春先から天候に恵まれ生育は順調に進んだものの、7・8月に雨がほとんど降らない干ばつで6/15播種のものがダメージを受け、収量が4/27播種のものに比べて4割減となった。対策として毎日のようにスプレーヤーで水散布を行ったがなかなか成果が出なかった。

一方で、気候の影響で病害虫が極端に少なく、病気の発生も全く見られなかった。全体を見れば品質は良く、収量も豊作となった。

また、管理作業では追肥や防除回数を少なくでき、労力軽減できたことは収穫となった。

今年は環境保全型農業に初めて取り組み、化学肥料・農薬使用回数を慣行栽培の半分にしたが収量は10a当たり791kgと満足のいく結果が得られた。

	種子量 (kg/10a)	窒素分量 (kg/10a)	農薬成分 使用回数	収穫量 (kg/10a)
慣行栽培	3	13	11	600
調査研究	6	6	5	791

4. 今後の課題と方策

環境保全型農業に取り組み、化学肥料・化学合成農薬の5割低減を実施していくと同時に栽培技術をより一層向上させ収量増を目指す。具体的には、堆肥散布や緑肥作物のより一層の導入を検討している。次年度は栽培面積を増やし、堆肥散布の比較調査を行っていく。その他次年度は今年できなかった道内他産地の視察や勉強会の開催を行っていききたい。

きぬさやえんどうは干ばつに弱く、病気にも弱い作物であるため、今年のような干ばつの年に備えかん水対策が今後必要になってくると思われる。リールマシンやスプリンクラーの導入を今後検討していききたい。

きぬさやえんどう収穫には多大な人手が必要であり、人材の確保が課題であるため、高収益作物ではあるが作付けがなかなか増えない原因の一つとなっている。一大産地である大正産きぬさやえんどうを他生産者とともに連携しあって広めていく対策、人材確保の対策についても検討していく。

通常発生する病害虫被害



うどん粉病



ハモグリバエの食害



灰色カビ病

※これらの病気はほとんど見られなかった。



生育順調な様子



曲がりも少なく綺麗な莢



高温により低い位置で花が咲いている様子